

「洛中洛外図屏風」を追って

杉並区 岡田 幹治（高田出身）

京都の全景を一双（一对）の屏風に描いた「洛中洛外図屏風」に興味を持ったのは、山形県の伝統ある三都市、米沢・酒田・鶴岡への小旅行を夫婦で計画したのがきっかけだった。2年前のことだ。

下調べをしたら、現在百近く残っている洛中洛外図のうち最高傑作（「上杉本」と呼ばれる「国宝」を米沢市上杉博物館が所有し、その複製が常設展示されている）が分かった。

上杉本は、室町幕府の十三代将軍・足利義輝が、上杉謙信に上洛して管領になってほしいというメッセージを伝えるため、当時二十歳を過ぎたばかりの絵師、狩野永徳に描かせたが、完成直前に義輝は非業の死を遂げる。死後完成された屏風を上洛した織田信長が見だし、同盟関係が必要としていた謙信に贈ったものとされている。

だから屏風の左隻（させき）には、謙信（と推定される人物）が輿に乗って花の御所（幕府）に向かう行列が描

かれている。御所には出迎えようとしている義輝（推定）が見える。

このような成立事情は上越生れのものにとつて実に興味深いが、それはこの屏風の魅力の一部にすぎない。縦一・六メートル、横三・六メートルの屏風一双には、当時の御所や武家屋敷の様子とともに、春夏秋冬の風物や行事、さらには庶民たちの生業（なりわい）が生き生きと描かれている。

その描写は実に細かく、登場する人物はさまざまな身分や職種にわたっており、合計二千四百八十五人。床屋の様子から当時、月代（さかやき）は剃るものでなく、毛抜きで抜くものだったことが分かるという。

だが、期待に胸を膨らませて上杉博物館に着いた私たちは肩すかしをくらう。模様替えのため常設展示が一時閉鎖中だったのだ。

念願がかなう機会は翌春やってきた。群馬県立歴史博物館（高崎市）が「洛中洛外図屏風に描かれた世界」という



上杉本 洛中洛外図屏風 右隻／米沢市上杉博物館所蔵



講演中の岡田幹治さん

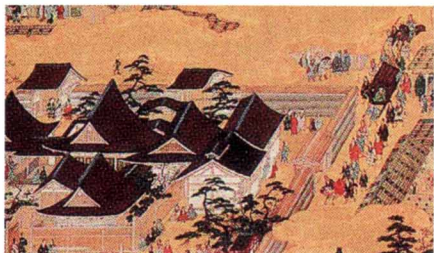
展覧会を開き、上杉本を含む計五双の洛中洛外図屏風が展示されたからだ。もともと上杉本の原本の展示は、五週間余りの会期のうちわずか五日間だから注意しなければならない。

会場で上杉本の前に立つと、画面いっぱい金色の雲が広がら、その合間に建物や人物が描かれた壮大な絵巻が目に見え込んでくる。とても華やかで、しかも人々のエネルギーを感じさせる。会場には高精細なデジタル映像も用意されていて、人々の表情やしぐさも細かく見ることができた。

続いて今春は、国立歴史民俗博物館（歴博＝千葉県佐倉市）が開いた「洛中洛外図屏風と風俗」展に出かけた。ここでは歴博がもつ六双の屏風を中心に展示が行なわれていた。歴博の教授によるギャラリートークも聴

き、洛中洛外図の変遷が理解できた。上杉本は歴博所有の複製の展示だったが、これも良くできている。上杉本やはり華やかさや情報の豊富さで抜きん出ている。

次はぜひ、〇八年に上越市で発見された「御所参内・聚楽第行幸図屏風」（こしよさんだい・じゅらくていきょうこうずびようぶ）を観たいと思っている。



上杉謙信（推定）の花の御所へ向かう行列



上杉本 洛中洛外図屏風 左隻／米沢市上杉博物館所蔵